

第52回日本胸部外科学会

八田 光弘*

第52回日本胸部外科学会は平成11年10月5日から7日まで東北大学藤村重文教授の会長のもと仙台市にて盛大に行われた。口演発表393題、ビデオ発表127題、示説321題、参加人数約三千人という大規模な学会であった。特に藤村教授の要望で、胸部大動脈瘤、肺癌の治療、先天性心疾患の遠隔予後を考慮した術式の選択、腫瘍特性から見た合理的な気道再建、食道癌の外科治療、低侵襲冠動脈手術、心臓、肺移植がシンポジウムのテーマとして選択され、活発な論議が展開された。会長の基本的な考えとして、胸部外科一文化から調和、再統合へという意図が随所に表れ、分野を越えた先生方の論議が会場を盛り上げる場面も多々見られた。特にその融合となるパネルディスカッションとして、井出先生、新田先生の司会による複合領域にわたる胸部臓器の手術では、演者の多彩な顔ぶれに加え、心臓と肺、大血管と肺、食道など、今回の学会にふさわしい企画がなされたパネルであった。

また、本年の特殊性としては、脳死下心臓移植が再開された後の学術大会であり、藤村会長の長年の肺移植における業績と日本移植学会でのご貢献の足跡からしても、感無量ではなかったかと推察される。心臓、肺移植のシンポジウムの後、特別報告のプログラムが設定され、その本年施行された脳死下心臓移植についての経過報告が大阪大学松田教授、国立循環器病センター北村副院長によってなされ、会場に大きな拍手がわき起こったのがもっとも印象的であった。長年、この肺移植の分野で労をとられた藤村会長が主催される学会で、このような機会が得られたことを会員のすべ

てが歓喜していた。壇上には、東京大学高本教授、会場前列では、前のシンポジウムの司会で、長年心臓移植の牽引役をされた東京女子医大小柳教授、同じく肺移植の長崎大学綾部教授、そして前列中央には川島康生元国立循環器病センター総長などがおられ、微笑みの中に大きな拍手を送られた。これらの演出は、誠に心憎いばかりであり、社会的な責務を果たした日本胸部外科学会の総括としては誠に重要かつ時を得た企画ではなかったかと拝察する。これらの偉大な先達の信念と努力がようやく実った喜びの拍手、この拍手の中に様々な人生の思いを込められていたに違いない。北村惣一郎国立循環器病センター副院長は、若い世代に引き継ぐために、と言われたが、国内の心臓移植、肺移植を引継ぎ発展させることは若い世代がにとってはまだまだ重責であり、これらの先生方の再結団式とも言えるのではないかと思われた。会場を見渡しても、以前よりも若い世代の出席が多くなっており、ますますの発展が期待される場所である。

私が参加したパネルディスカッションⅠ：心臓、肺移植適応疾患に対する最近の治療戦略では、心臓移植後管理、人工心臓の導入、バチスタ手術の適応、肺移植の現状、肺高血圧症に対する総合的な治療戦略などの発表から、心臓移植後の管理の重要性、特に慢性期冠動脈硬化症の治療について、適応ではバチスタ手術との関連性などが論じられ、提供者の少ない本邦では、移植以外の治療手段も十分に考慮しつつ、移植を待機するという姿勢が重要であろうと思われた。また、人工心臓の信頼性は年々向上してきており、経験する症例も、施設も増加してきている。早期に全国的な規模で広がる様相を見せていた。肺移植は生体肺移植の

*産業医科大学第二外科

成功と渡航肺移植患者が良好な経過を続けていることが特に印象的で、脳死下からの肺移植もはや時間の問題という印象が強に残った。全体的な移植のレベルとしては、演者らの海外での活躍、研鑽の成果により、欧米にさほど変わることはない高いレベルまで達してきているというのが客観的な評価であろう。

学会の全体的な感想としては、臨床的な演題が多く、実験研究が少ない傾向にあった。細胞生物、分子生物、実験といった地味な演題は、G会場になり、若い人の目に触れづらくなってきている。これは大変残念なことではなかろうか。臨床的な

シンポジウムでも、基礎医学の所見などに根拠を求めた臨床研究が少なくなっており、術後生存率や自らの手術経験だけで話がすむような傾向にあるように見受けられた。新しい外科学の創造や現状の外科の発展は、常に基礎研究からヒントが生まれる。理論や理念で議論する姿勢を学会はもっと明確にしなければいけない。現在では各種研究会が基礎的な発表の機会を担っており、総会では臨床成績ということかもしれないが、総会でこそ、基礎に根ざした優秀な論文の討論がA会場で行われるようにありたいと考えた。

今後の日本胸部外科学会の発展に寄与する立派な学術集会であった。